

## 筒井 功：第19回国際海藻シンポジウムに思う

バンコクから成田経由でつくばに戻り、所属先で帰国手続きを行う。その後夜遅くに、急いで神戸入りをした。筆者は大阪生まれだが、これまでほとんど神戸には足を入れたことが無く、シンポジウム会場付近も初めて見る風景であった。会場の最寄り駅である市民広場駅周辺には団地もあり、多くの人が住んでいるはずなのに食堂や店がほとんどなく、住み慣れたバンコクと比べると生活感のない無機質な印象を受けた。

チェックインしたポートピアホテルのロビーには、ウェルカムパーティーに参加した後だと一見ただけでわかる、欧米やアジアからのシンポジウム参加者がソファで話し込んでいた。国際シンポジウムへの参加は、これが2回目である。

筆者はシンポジウムの間、スライド進行などを遂行する会場係としての役割を担った。海外在住のため日本の学会にはあまり参加出来ず、有名な日本人学会員でさえ名前しか知らない筆者であるが、高知大の峯一朗先生を中心に、コンピュータールームに詰めていた諸氏と共に無事その役割をこなすことが出来た。とくにコンビを組んだ電力中央研究所の本多正樹氏には、数々のフォローをしていただいた。

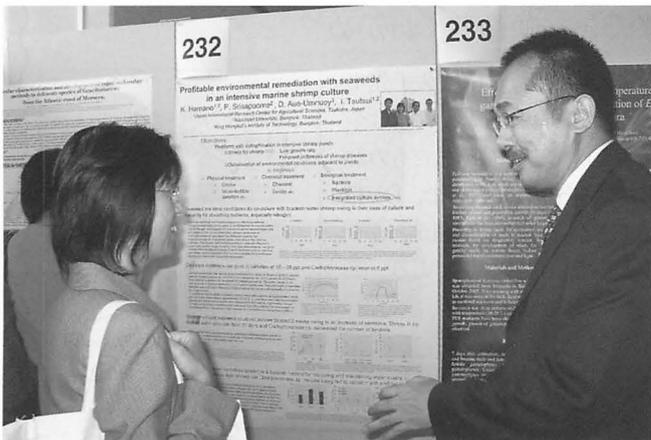
シンポジウムの内容は、講演・ポスターともに海藻という共通点をもとに、分子生物学から生化学・分類・養殖・利用・加工・生態・環境・地球温暖化など非常に多彩であった。近年は細分化・専門化されたシンポジウムの多い中、多様な分野が混在する本シンポジウムは、自分の専門外の研究を知ることが出来るばかりでなく、分野外の共同研究に発展する出会いもあり、非常に評価できる。このような国際海藻シンポジウムの特徴を最大限活かすには、ミニシンポジウムのテーマをあえて細分化せず会場を少なくして、分野外の研究者が講演を視聴する機会を増やすのもよいのかもしれないと感じた。また、分子生物学などいわゆる先端分野の国際学会では、先進国と呼ばれる国々の参加者がほとんどであると聞いているが、本シンポジウム

はそうでない国々からの参加者も多かった。研究環境に恵まれない国々の参加者らにとって、共同研究やアイデアの創造につながるこのような機会は大いに有用であろう。

ただ会場周辺にはレストランや食堂自体が少ないうえに、英語が通じる食堂及び安価な食堂がほとんど無い状態であった。欧米諸国からの参加者ならば、会場に隣接したホテルのレストランで高価な食事をすることが可能であろう。しかしながら、東南アジア諸国で長く暮らしてきた筆者には、途上国と呼ばれる国々からの参加者にとって日本の定食一皿がいかに高価であるかは痛いほどわかるし、知人のうち何人かは昼食を摂らなかったことも知っている。非常に心苦しく感じていたのだが、会場係として次の準備があったため、自分自身の昼食もままならなかった事情もあり、何ともしよあげることが出来なかった。安価な弁当の販売をお願いするなど、事務局として何らかの対策が出来たらさらに良かったのではないかと感じた。

会場係として気になったのは、シンポジウム参加者によるスライドの写真撮影である。前席から会場全体を眺めていると、すべてのスライドを撮影している参加者が少なからずいた。著作権の問題も含め、パワーポイントをむやみに撮影するのを控えるのが常識であるばかりでなく、スライドが変わるごとにストロボがたかれることは、発表者にとっても視聴者にとっても、進行と内容の理解に多大な悪影響を及ぼすのではないだろうか。デジタルカメラが発達し、興味のあるスライドは写真に撮っておきたい気持ちも理解できなくはない。しかしながら可能な限りスライドの写真撮影は行わないといった、参加者の自制心を期待したいところである。

筆者は“Integrated aquaculture: Essential role of seaweed cultivation (Global expansion of mari-culture)”のミニシンポジウムで、ウシエビと海藻類の混合養殖について発表した。講演のあとには、「契約しているエビ養殖業者にアピールするた



ポスター会場。和気あいあいとした雰囲気の中で発表・質疑応答が行われていた。



エクスカーション：兵庫県明石市のノリ養殖場。洋上養殖の見学を終えて、皆で記念撮影をした。

